社会福祉法人サンライフ／サン・ビジョン

社会貢献事業推進委員会だより

第８号

社会貢献事業について…随想②

「歳は取って見ないと分からない」

理事長　堤　修三

私は、今年の末で古稀を迎える高齢者ですが、実際、年寄りというものは自分がなって見ないと分からないものです。認知症初期には比較的直近の記憶から失われていくと言われますが、私の場合、60 歳を超えてから、イメージは脳内に明瞭にあるのに、どうしてもその名前を記憶装置に入力（≠出力）できないということが増えてきました。例えば、砂田橋に SL の施設があることは認識しているのに、その“砂田橋”という言葉が出てこない。何故か、頭の中で“砂田橋”が自動的に東京は霞が関の法務省や検察庁などがある“祝田橋”に変換されてしまうのです。１ 年たって、頭文字はＩではなく S だと強制入力してようやく、JF 祝田橋ではなく、JF 砂田橋がスムーズに出て来るようになりました。

乳幼児と比べて高齢者の個体差はずっと大きいとされますが、個々の高齢者の老後の生き方は、現在の心身状況の違いにとどまらず、その方の人柄はもちろん、今まで歩んできた人生によっても異なるはずです。亡くなる瞬間まで個々の人間として生きていくと考えなければなりません。“寄り添う介護”も簡単ではないのです。

高齢者はどのような気持ちで施設に入所し、また、在宅サービスを利用し始めるのでしょうか。入所者や利用者がはじめて施設や事業所に来られたときに対応される皆さんはよくご存じでしょう。自宅に帰りたい、自分はこんなところに来たくないと言う高齢者を宥め、慣れていただくのもケアの技術でしょうが、高齢者にそんな思いを“断念”していただくのが介護職の技量のひとつだとしたら、介護の仕事も因果な商売というほかありません。しかし、介護の仕事は、高齢者の今までの生活や今までできたことの“断念”を共有する（できるよう努める）ところから始まるのではないでしょうか。

おそらく「老年的超越」の域に達しておられる高齢者でなくとも、多くの高齢者は、今までできたことが少しずつ減っていくことを受入れ（断念）つつ、さほど死を意識することもなく、与えられた一日一日を淡々と過ごしておられるのかもしれません。とは言え、人間は、自分の死を正面から見つめ続けられるほど強くはありません。それは高齢になっても変わるところではないと思います。モンテーニュも、『エセー』のなかで「私が望むのは、…死が私のもとを訪れるのが、私がキャベツでも植えているとき、それも死に無頓着で、そればかりか自分の庭園が未完成なままであることにも無関心であるようなときであることだ」と書いています。

皆さんは高蔵寺ニュータウンで暮らす津端修一・英子夫妻の日常を描いたドキュメンタリー映画『人生フルーツ』をご覧になりましたか。住宅公団に勤める技師であった津端さんが、四角いコンクリートの箱を建て続けることに疑問を持って退職し、ニュータウンの端の風が通る雑木林の中に家を建て、野菜や果樹を育てながら自然に触れる生活を送る様子を１年半にわたって撮り続けた作品です。ところが、修一さんは、１年ほどが過ぎたある日、気持ちよさそうに昼寝しながら、目を覚ますことがありませんでした。何という理想的な大往生でしょう。私も、『人生フルーツ』を観て以来、津端修一さんにあやかりたいものだと神仏に祈っております。

★社会貢献事業推進員のつぶやき②★
平成 30 年度の社会貢献事業について思うこと

春日井エリア　社会貢献事業推進員　安田

推進員の眼

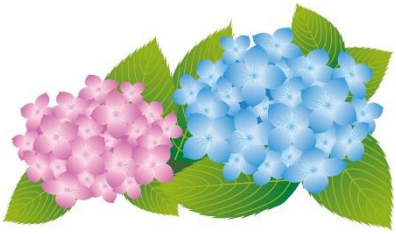
　社会貢献事業推進委員会では何を話し合っているのだろうか―、定期開催している委員会では議事録を作成、各エリア・建屋にも周知されており、それを頼りに窺い知ることができる。ご覧いただければすぐに分かるように、その幅は非常に広い。直近の委員会の議案を見てみたい。

「4/23 委員会の議案」

山下室長の研修報告。生活困窮者支援事業の江南市・江南社協との打ち合わせ報告。奈良県立医科大への見学企画について。生活困窮者支援事業の終結カンファレンスの報告。就労支援事業報告（主に退職となってしまったケースの検討）。子ども食堂の実施について。法人内職員への生活困窮者支援（生活相談のようなイメージ）の検討。７月開催予定の CSW 養成研修の計画。

　やはりとても幅広い。発言する各エリアの推進員は緊張する。その理由は（堤理事長が参加されていることは勿論ですが―）この事業そのものが先端的な取組みであり、どのような形態になっていくのかが、良い意味で全く決まっていない点にある（と思う）。当然、話し合う内容も先端的なものとなる。福祉に関する既存の制度はもちろん、どんな団体がどう動いているのか、どういう運動が起こっているのかにも注視していないといけない。議案が移るごとに切り替えが大変だったりする。

　現在、推進員は、相談業務職員５名という顔ぶれ。それぞれの持ち場で触れた現実を持ち寄り、それを材料にこの事業の方向を検討する。しかも自由に発言できる雰囲気で。“すごい、こんな社会福祉法人、他にあるのだろうか。”

毎回ひっそりと思っていたことをここに報告します。

平成 30 年３月 13 日にコミュニティソーシャルワーカー現任者研修を実施しました。